

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (58)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

本連載は初回から言語的に morphophoneme (形態音素) から見る「語釈」であるが、英国の著名な作家で Basic に相当な関心があり *Politics and the English Language* 『政治と英語』(1946)を著した G. Orwell (G.オーウェル) の論考も視野に入れている。

今回(1)では Trump 前大統領の当初からの公約であったメキシコ国境の壁建設で議会で思うようにならない歯がゆさの伝わる tweet text を、そして(2)では時をさらにさかのぼり英語とスペイン語の国アメリカを知るためスペイン語翻訳版 tweet を参考にもする。

(1) We are building the Wall now, but the reason the badly needed Wall wasn't approved in the Republican controlled House and Senate was that we had a very slim majority in the Senate, & needed 9 Democrat votes. They were totally unwilling to give Wall votes to us, want Open Borders. (July 7, 2019)

▲「国境の壁は建設中であり、このどうしても必要な壁 [badly-needed と hypen を入れておく] が上下院で不承認となった理由は上院で共和党がわずかな多数であり 9 票の民主党の賛成票が必要であったからだ、民主党議員は問題にまったく消極的で国境の開放を望んでいる」という内容。まさにそのとおりで、上院での共和党の議席数がまだ不足だったので強気の Trump 氏が歯がゆさを感じているのが分かる。国境の壁問題は重要。

太線語 approve の名詞形 **approval** (承認) が Basic 語であるが、これは他の Basic 語 **probable** と同系である点には注目されてよい。「証明すること」の意味をもっているが、probable (十分ありうる・多分) にもこの証明の意味が背景にある。「高い確率でそうである」ということである。その点では確率の低い Basic 語 **possible** とは違う。

approval, probable は un-Basic 語の prove (証明する)、さらに実は approach (近寄る)、reproach (非難する ←「後ろに近づく」)、approximate (概算する・近似の) と同系である点は注目に値する。証明・立証することは空間的には「近づけること」とも結びつく。[pru:v], [prɒb], [prəʊf], [prɒk] などと響く音が「近いこと」の意味をもっている。ここにも言語の深奥に根付いている spatial metaphor (空間隠喩) が見て取れる。

太線語 slim は本連載(4)の①ですでに扱ったのであるが、確認しておきたい。この語の音感から「薄っぺらなこと」「滑(なめ)らかなこと」「滑(すべ)ること」の root sense (原義) を感知したい。子音[s]がそういう意味をもっている。Basic 語 **slip, slope, sleep**、プラス α Basic 語 *slide* (スライド)、un-Basic 語 slender, sleeve, sled (そり) などが同系である [拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(77)参照]。

ここでこの tweet を decode 化してみるが、最初の文の深みが 6 層となり理解上やや負担はかかるかもしれない。書き起こしの書写 transcription には好例と言えよう。

STATEMENT					
		THEME : NP	RHEME : VP		
STR	C/C	N ₁	COP/V	N ₂ /N ₃ /A	ADV
1	φ	We	are building	the Wall	now, /
2	but	the reason	φ	φ	φ

3	φ	the badly needed Wall	wasn't approved	φ	in the Republican controlled House and Senate
4	φ	φ	was	φ	φ
5	that	we	had	a very slim majority	in the Senate,
6	and	φ	needed	9 Democrat votes. //	φ
1	φ	They	were totally unwilling	φ	φ
2	to	φ	give	Wall votes	to us, /
3	φ	φ	want	Open Borders. //	φ

(備考) 単一斜線 (／) は各々の文での意味的 2 分割線。

本連載(48), (50)で言ったがこの種のモデルは 81 個の升目の中で展開する将棋盤上での **panoptic** な世界と似ている。「将棋言語」(the language of chess)とも呼びたいが、且に見えない不可視の pattern recognition (パターン認知) が将棋にもあろう。丸わかりとなったあと何度も反復読みと共に Basic での言い方も何かと考えておくのである。

次にこの tweet 文例が発話されたものと仮定し、本連載でたびたび見ている弱音系と強音系の 2 分割による英語に特徴的な iambus (弱強リズム) の一端を確認してみる。

語の弱音・強音で感知する英音の心的2拍子リズム(mental prosody)

(弱音系)	(強音系)
We are	building
the	Wall now,
but the	reason
the	badly needed Wall wasn't approved
in the	Republican controlled House
and	Senate was
that we	had
a	very slim majority
in the	Senate,
and	needed 9 Democrat votes. //
They were	totally unwilling
to	give Wall votes
to	us, want Open Borders. //

ここでは最初の文中での wasn't [wɒznt]と was [wɒz]を強音系とし分類したが、こういう場合はつづく文の内容が明確になるので若干なりとも強音化され響くことは多々ある。また 2 番目の文中での us もここでは強音系として分類した。固定したものではない。

[以下、スペイン語翻訳版もある tweet (2018.01- 05)より — 2 言語対照]

(2) It was my great honor to welcome Mayors from across America to the WH. My Administration will always support local governments — and listen to the leaders who know their communities best. Together, we will usher in a bold new era of Peace and Prosperity ! (January 24, 2018)

cf. Tuve el honor de recibir a Alcaldes del país en la C.B. Mi Administración dará apoyo a los gobiernos locales y escuchará a los líderes que mejor conocen a sus comunidades. ¡ Juntos, entraremos en una nueva era de paz y prosperidad ! (24 de enero, 2018)

▲文中の語を大文字書きで任意に強調する Trump 氏独特の正字法(Trump orthography) が見られる。word stress (語強勢) も固定したものはまるでないことの証しの例である。

「全国から市長を White House に招き光栄だった、わが政権は地方自治体を常に支援し、地域を熟知するリーダーたちに耳を傾ける、共に平和と繁栄の新時代に大胆に立ち向かおう！」という内容である。

太線語 mayors (市長) は上の(1)での majority (大多数) や、カタカナ語の「メジャー」ともなっている major と同系で「大きいこと」の意味から来ている。

太線語 usher (誘導する・案内する) が仮に未知でもこの語が空間詞 in と共起し usher in となっている。必ず何かに「入ること、入れること」の意味となる。

太線語 bold (大胆な) が Basic 語 **blow** と同系だと理解することには意義がある。

太線語 prosperity (繁栄) は本連載(49)の(1)で動詞形 prosper で扱い、desperate (必死の)、despair (失望) などと同系で知覚的に「眼前に広がり展開すること」(to be seen) が原義(root sense)だと言った。PIE etymon (印欧祖語の語根) の morphophoneme (形態音素形) は/SPEK/である。Basic 語 **respect, special**、プラス α Basic 語 *specimen* (標本) など、un-Basic 語 perspective, spectacle, expect など同系。この原義が感知できれば相当な域にある。「知覚」を意味する音素/sp/のすくい取り(scooping-up of the phoneme /sp/)で何かと思索するとよい[/sp/に関しては同上拙著、第二部、例(112)参照]。

words の意味の総和が Sentence の意味ではなく ($w_1 + w_2 + w_3 \dots w_n \neq S$)、両者の関係は等式とは異なる化学反応式 (例、 $O_2 + 2H_2 \rightarrow 2H_2O$: 酸素+水素→水) に近いものであろう。glosseme (言素) からの解体と復元である [言語哲学の思索書 Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning*, Chap. IV など参照]。

Ogden-Richards は perception (知覚) に関連し「色」の orange 色なら definition (定義) は象徴としての現物提示がよい旨を言っている [*ibid.* Chap.VI, pp.117-118 参照]。

If we are asked what ‘orange’ is referred to, we may take some object which is orange and say “‘orange’ is a symbol which stands for This.” (p.117)

これは EP 本への投射の一端で ostensive definition (実物連想定義) であり、モノの symbolic reference (象徴指示) により naming (命名) するという考え方が背景にある。

なお、(2)の tweet 一行目の ... welcome Mayors from across America to the WH (全米の市長を White House へ招く) は起点(from) → 経路(across) → 着点(to)の3つを同時に描写する spatial-motional representation (空間移動表象) である。こういう空間詞の用法にどうしても習熟したい。そうでない限り所詮、英語はモノにはならないだろう。特にここでは across の使い方はポイントで、これなしでは意味的に不成立となる。

さらに、こういう場合の from across と across ... from も区別しておきたい。たとえば「ジョンはテーブルで私と向かい合って座っていた」であれば John was seated across the table from me. で、これが英語での 空間位置関係の指示描写法 である。

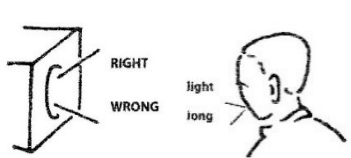

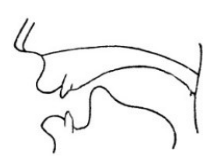
次に前回同様、音声面から上の(2)の tweet 文例中で[l]音と[r]音の現れる箇所（米音の場合）にすべて注目してみる。太字体とし[l]音を二重下線、[r]音を単一下線で示す。

(2)' It was my great honor to welcome Mayors from across America to the WH. My Administration will always support local governments – and listen to the leaders who know their communities best. Together, we will usher in a bold new era of Peace and Prosperity !

英語の発話では子音[l]と半母音[r]が支配的に交差し流れる。この両者は英語を原理的に支配している音でどうしても違いが明確に聴取できたいが、自分で分けけて言えても、聴取は難しい。ヘルツ(Hz)も違い[l]音は 3,000Hz 程度、[r]音は 2,000Hz 程度ともされ高周波である [cf. 日本語の周波数帯は 125~1,500Hz、言語別周波数帯の違いは本連載(49)参照]。この流れに乗れない限りはやはり本当には英音に耳は開かないはず。[l]音と[r]音を中核にその発話上の生理学的呼吸法と acoustic phonetics（音響音声学）的な「響き方」の感知のため、気道(respiratory tract)としての腹部→肺→喉→口腔→舌尖→唇→鼻腔が一丸となる共鳴箱(sound box)でモノラル音響(monophonic)ではないステレオ音響(stereophonic)で流れる空気(breath flow)を感知していくこととなる。特に語中・語末で鼻音化した米音[r]が stereophonic で流れる優雅な響きは筆者の好みである。

語頭・語中・語末の[l]音と[r]音の響き方に徹底的こだわるべきである。英語の入門(way in)から出門(way out)へということになる。本連載(45)また前回(57)で触れたが K. L. Pike 風の etic (< phonetics)と emic (< phonemics)の違いの認知と、allophone（異音）から phoneme（音素）のすくい取りである。特に語中に[l], [r]音が混在する例や、固有名詞中での[l], [r]音に注目しての音素/l/, /r/のすくい取り(scooping-up of the phonemes)である。

<例> : parallel, meteorological, vocabulary, Marllyn Monroe, Ellvis Presley, etc.

	[l] (/l/)	[r] (/r/)
		
(EP, Bk III, p. 64) cf. p.68	(The air goes out from the sides of the tongue and through the nose.)	(The air goes out from over the tongue and through the nose.)

きわめて基本的な事項で、そもそも sound（音声）の材質は物理学的な空気振動(air vibration)である。一方、言語学的な phoneme（音素）は概念(concept)であり structural linguisticsが発見した。このあたりの事情を抜きには「英語の音声」に関しては何も語れない理屈となる。語の sound は EP 本 II で Noises and songs are sounds. What are sounds? They are the effects of waves in the air.という文中で初出(p.134)となる。EP 本 I~III の真の内容把握のためには背景にある言語哲学の見定めが必要となる。

また、日本人の英語修得上で必要な聴覚の拡張があるが、ネイティブ講師による英語のボイストレーニング教室(English Voice Training School : EVTS) [仮称]でも開設され入門期の検定本 3 巻の[l], [r]音を軸にした音読 reading 法が徹底されるとよからう。

上の(2) cf.のスペイン語翻訳文での honor, administración, local, gobierno, líderes, comunidades, nueva, era, paz, prosperidad はそれぞれ英語の *honor, administration, local, **government**, leaders, communities, **new**, era, **peace**, prosperity* に対応すると同時に互いに同系語である（太字体は Basic 語、イタリック体はプラス α Basic 語）。

